様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月３日現在

機関番号：12603
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：21520363
研究課題名（和文）環太平洋における東アジア系ディアスポラ戦後文学の関係史的研究
研究課題名（英文）Study on East Asian diaspora's postwar literature in the Pacific Rim from the relational-historical perspective
研究代表者
李　孝徳（LEE HYODUK）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：90292721

研究成果の概要（和文）：東アジア系（日系、朝鮮系、沖縄系）移民の第二次世界大戦後の文学表現は、日本の近代文学・比較文学あるいは各国文学研究においては、特殊なものとして個別的にしか扱われてこなかった。本研究では、こうした文学表現を、日本とアメリカ合衆国の植民地主義と人種主義が生み出した環太平洋地域のディアスポラによる、共通した「根こぎ」の経験が普遍的に表されたものと捉え、関係史的な観点から新たな文学研究のアプローチを提示した。

研究成果の概要（英文）：The Postwar literature of East Asian—Japanese, Korean, Okinawan—has been marginalized and individuated by mainstream literay study in Japan. In this study, I consider and crarify that these writings reflect universality of common 'disrooted' experiences of the diasporas in the Pacific Rim under colonial rule and racism of US and Japan from the retational-historical perspective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	300,000	90,000	390,000
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・文学一般
キーワード：比較文学　移民　植民地主義　ポストコロニアル　人種主義　ディアスポラ

１．研究開始当初の背景

東西冷戦の終結を受けて、1990 年代からエスニック・マイノリティや移民の文学を植民地主義や帝国主義の負の「遺産」として読みなおすポストコロニアル研究が欧米において始められたが、日本を含む東アジア地域ではこうした研究が始められることはほとんどなかった。東アジアにおいてディアスポラを生み出した植民地主義の問題は、大日本帝国日本がアジア太平洋戦争で連合国に敗北して、中国や朝鮮半島が分断国家となったために、二次的なものとして周縁化されたからであった。また、欧米のポストコロニアル研究は、欧

米の「聖典」を脱構築して脱神話化するために始められたもので、当の被植民地人の表現は脱植民地化の表明として論じられることはあっても、植民地支配によって移動を強いられた人々の表現を、国民文学の枠組みを越えて、その意義を論じようとするものは東アジアではほとんど見受けられなかった。そのため、各国語・ 各国民文学の研究が本研究開始当初の背景となる。その基幹的な学問状況を、対象となるエスニシティ別に即して記せば以下のようになる。

（１）日系ディアスポラの文学研究

本研究で扱う日系ディアスポラの文学研究は、 合衆国の日系アメリカ人文学の研究となるが、この分野の先駆的な体系的研究がエイレン・キム『アジア系アメリカ文学』(Elaine H. Kim, Asian American literature : an introduction to the writings and their social context, Temple University Press, 1982)であることからわかるように、米国では、日系アメリカ人文学はアジア系アメリカ文学の一角をなすエスニック文学の一潮流として位置づけられており、アプローチにトランスナショナルな関係史的枠組みは用いられていない。日本においても植木照代・ゲイル・K・佐藤編『日系アメリカ文学』（創元社、1997 年)は日系アメリカ人文学を対象化したという意味では先駆的ではあるものの、あくまでもアメリカ文学の一分野として扱っており、枠組みとしては本研究に資するものがない。この点、本科研代表者は日系アメリカ人文学のひとつの嚆矢とされるジョン・ オカダ 『ノー・ノー・ボーイ』（John Okada, No-no-boy, University of Washington Press, 1978 [1957])を近代の移民や難民一般に通底する問題を扱ったディアスポラ文学として位置づける論文を発表した（Hyo Duk Lee, “Inscriptions from Those without a ’Place’：World Literature as Read from the Diaspora in John Okada’s No-No Boy”, Quadrante, No.9, pp.411-420, 2007）。なお移民研究の分野では、近年の日本における日系移民研究は、視点が日米間に限定されているものの、「国史」にとらわれない関係史的なアプローチを大きく発展させており、特に粂井輝子『外国人をめぐる社会:近代アメリカと日本 人移民』（雄山閣出版、 1995 年）、 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』（リーベル出版、1995 年)及び『戦争と移民の社会史:ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』（現代史料出版、2004 年）、南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学:エスニシティ、人種、ナショナリズム』（彩流社、2007 年)の取り組みがある。

（２）朝鮮系ディアスポラの文学研究

朝鮮系ディアスポラ文学も長らく民族文学の一部として取り扱われてきたためにトランスナショナルな関係史的な視点は希薄だったものの、近年は在日朝鮮人文学が注目を集め、従来の民族文学を超えた枠組みを持ちはじめているように思われる（たとえば金フナ『在日朝鮮人女性文学論』作品社、2004 年）。日本の在日朝鮮人文学研究には一定の蓄積があり、川村湊『生まれたらそこがふるさと:在日朝鮮人文学論』（平凡社、1999 年)といった重要な研究もあるが、アプローチとしては(文学史的な)作品研究であり、やはりトランスナショナルな関係史的視角は用いられていない。ただし植民地期に限られてはいるが、任展慧 『日本における朝鮮人の文学の歴史:1945 年まで 』（法政大学出版局、1994 年)は日本と朝鮮半島の関係史的な視点を取り入れた先駆的な研究である。この点で、本科研代表者は、戦後日本の文壇に登場した在日朝鮮人文学が大日本帝国の植民地支配と、戦後にその覇権を受け継いだ米国の東アジア支配の地政学と国際関係の変化への「異議申し立て」として誕生したものであることを論じた(李孝徳「ポストコロニアルの政治と『在日』文学」 『現代想思 7 月号臨時増刊 戦後東アジアとアメリカの存在』第 29 巻 9 号、青土社、154-169 頁、2001 年」)。

（３）沖縄系ディアスポラの文学研究

本研究では、第二次世界大戦期から日本復帰戦までの沖縄をテーマにし、当事者たちによって書かれた文学をディアスポラ文学という視角で捕らえるものである。それは第二次世界大戦(沖縄戦)と米軍 占領を経て、地

勢的にも人口動態的にも大きく変容した戦後の琉球列島では、海外移民、本土への疎開在留者、琉球列島内移住など、人々がかつてない社会移動を経験したからであり、戦後の沖縄文学はそうした特異な社会変動と社会移動の経験が生み出したものだからである。そうした歴史的な特異性から沖縄 文学を論じたものには先駆として岡本恵徳『沖縄文学の地平』(三一書房、1981 年)があり、より新しい研究としては Michael S. Molasky,The American occupation of Japan and Okinawa: literature and memory, Routledge, 1999 や新城郁夫『沖縄文学という企て:葛藤する言語・身体・記憶』（インパクト出版会、2003 年）があるが、こうした研究も日米と沖縄の関係周到に考慮に入れてはいるものの、東アジアあるいは環太平洋という地政学的な関係史を射程にしてはいないし、「ディアスポラ」といった視角も取られてはいない。 この点、本科研代表者が編者として加わった中野敏男・岩崎稔・大川正彦・李孝徳編『継続する植民地主義:ジェンダ ー/民族/人種/階級』（青弓社、2005 年）、波平恒男・屋嘉比収・中野敏男・李孝徳『沖縄の占領と日本復の興:植民地主義はいかに継続したか』(青弓社､2006 年)という 2 冊の論文集では、個々の論文を東アジアにおける戦前の日本と戦後の米国の覇権移動を前提に、沖縄、韓国、日本を関係史的に位置付ける枠組みが提示されている。

（４）環太平洋地域の人種主義体制

さらに 2007 年度に申請者が受入した大学教育の国際化推進プログラム(海外先進研究実践支援)で行った「環太平洋アジア系移民文学･文化の比較研究」(大学としては「環太平洋圏多文化社会の比較言語 文化研究」)では、環太平洋における東アジア系移民の文学・文化の資料を、ハワイ諸島を中心に調査・研究したことで、上述の(1)(2)(3)における本科研代表者の研究成果を 1940 年代から 50 年代の「環太平洋」における東アジア系ディアスポラを関係史的に結びつけて論じる枠組みを着想する視座を得た。と同時に、第二次世界大戦後には、帝国列強の植民地主義が人種主義として「国内問題」に変化し、植民地主義が生み出したディアスポラの問題がエスニック・マイノリティの問題として周辺化され、歴史的に顧みられることがなくなってしまう自体を考察したことで、東アジアにおける戦前の日本の帝国主義がアジア太平洋戦争後には人種主義として現れる事態へのパースペクティヴを得ることができた。

２．研究の目的

本研究「環太平洋における東アジア系ディアスポラ戦後文学の関係史的研究」の目的は、これまで各国語・ 各国民文学においてマイノリティの文学として周縁化されてきた、環太平洋地域における東アジア本系 研究では日系、朝鮮系、沖縄系のディアスポラの戦後文学作品を、単なる同時代性や主題の類似性による比較文学（史）的視点からではなく、 地政学的、 国際政治的に密接に結びついた関係史的な観点から分析・考察して、これまで非主流の文学作品としての位置づけから、今日のグローバル状況下の先進諸国ではむしろ確固たるジャンルとなりつつある「移民文学」や「ディアスポラ文学」のダイナミクスが提示されたものとして読み直すことで、 今日的意義を歴史的かつ理論的に評価し直すことである。また、そうしたディアスポラ文学を「環太平洋」という観点で論じるためのフレームワークを、戦前の大日本帝国の植民地支配から、戦後のアメリカ合衆国の軍事的覇権の掌握によって環太平洋を覆った人種主義体制（欧米の変形したもの）として分節することである。そうした視座から行われる、本研究のエスニシティ別の研究目的を示せば以下のようになる。

（１）日系ディアスポラ文学

これまでアメリカ合衆国社会において、第二次世界大戦中の強制退去や強制収容を経験したことで周縁化された日系アメリカ人による、戦後の社会で権利と承認を求めるアイデンティティ文学とみなされてきた日系アメリカ人の戦後文学を、大日本帝国からアメリカ合衆国というアジア太平洋戦争で交戦することになった二つの帝国を移動することで、特異な経験を持つに至った日系アメリカ人のディアスポラ文学として読解し直す。

（２）朝鮮系ディアスポラ文学

韓国では異教の朝鮮民族文学の亜種として、日本ではマイノリティの戦後文学として理解されてきた在日朝鮮人文学を、戦前から戦後にかけて移動を強いられた朝鮮人ディアスポラの、そうした帰属自体を脱構築するテクストとして読み直す。同時にのその読解は、環太平洋地域における米国と日本の覇権下における、政治かつ歴史への批判的な証言でもあることを示す。

（３）沖縄系ディアスポラ文学

琉球処分から沖縄戦、戦後の軍事占領から基地配備にいたるまでの、日本本土およびアメリカ合衆国による植民地支配と占領という関係において二項対立的に読解されてきた沖縄文学を、ポストコロニアル文学として世界史的な位置づけで読解する。同時に、沖縄文学がポストコロニアル状況において、ディアスポラ経験を内包させているがゆえに、普遍性を獲得していることを示す。とはいえ、本研究ではこうした沖縄文学の読解を、単なる文学（史）的な考察にせず、「環太平洋」という超地域的かつ関係史的観点を導入することで、沖縄文学が戦後日本の歴史表象に対する批判的介入であることを明らかにする。

（４）環太平洋地域における人種主義体制

戦前の大日本帝国の植民地支配から戦後におけるアメリカ合衆国の軍事的覇権の掌握という権力移譲において、日本、朝鮮半島、沖縄で形成されてきた支配体制が、構造的には、欧米では西洋における反セム主義と西欧による非ヨーロッパの植民地支配において分節されてきた人種主義体制にほかならないことを示し、日本、朝鮮半島、沖縄で構築されている、その構造を明らかにする。

３．研究の方法

本研究「環太平洋における東アジア系ディアスポラ戦後文学の関係史的研究」では、これまで各国語・ 各国民文学においてマイノリティの文学に対する文学研究として扱われてきた環太平洋地域における東アジア（日系、朝鮮系、沖縄系）のディアスポラの戦後文学作品を、単なる同時代性や主題の類似性による比較文学（史）的視点からではなく、地政学的、 国際政治的に密接に結びついた関係史的な観点から分析・考察して、これまで非主流の文学作品としての位置づけから、今日のグローバル状況下の先進諸国ではむしろ確固たるジャンルとなりつつある「移民文学」や「ディアスポラ文学」のダイナミクスが提示されたものとして読み直すことで、今日的意義を歴史的かつ理論的に評価し直すべく、（１）アプローチ、（２）記述方法、（３）理論的な枠組みを新たに構築しようとするものである。

（１）アプローチ

本研究が対象とする東アジア系ディアスポラ戦後文学とは以下のような文学作品を指す。環太平洋地域の覇権がアジア太平洋戦争とその後の冷戦構造を経て日本から米国に移った 1940 年代から 50 年代にかけて、合衆国西岸の日系住民、在日朝鮮人のように「解放(第二次世界大戦の終戦)」以後に朝鮮半島以外の旧大日本帝国の版図に残留した朝鮮人、沖縄戦以後に日本本土や琉球列島内に移住した沖縄人の各コミュニティ、ホスト社会、ホームランドおよびその諸関係の劇的な変化をテーマとし、当事者たちによって第二次世界大戦後に書かれた文学作品である。もちろん単にこうした出自を持つ人々の文字表現は無数にあるわけだが、本研究では単に文献学的な考察を目的にせず、各国文学の中で一定の評価を受けている文学作品を、予備的な調査に基づいて、「環太平洋」という超地域的かつ関係史的観点を導入するために選定し、このフレームワークが開示する可能性を示そうとするものである。

（２）記述方法

こうした東アジアにおけるディアスポラの文学作品は、欧米のように宗主国と植民地の関係が戦前の問題系を連続的に抱えてきた場合と違って、アジア地域に帝国として覇権を握り、こうしたディアスポラを生み出した大日本帝国は、アジア太平洋戦争で敗戦国になるとともに植民地を手放すことで、戦前の植民地の問題が国内問題・外交問題としても消失してしまったために、各々の集団の文学表現は、ディアスポラ文学としてではなく、各国のエスニック・マイノリティ文学（日系

アメリカ人文学、在日朝鮮人文学、沖縄文学など）としてのみ位置づけられてしまうことになった。そこで本研究では、各国（文学）史として行われてきた研究成果を受け継ぎつつ、一方でそこから抜け落ちている超地域的・関係史的観点–エスニック集団がホスト社会でマイノリティとなるに至った経緯の、出身地と移民地との社会・歴史・文化的関係–に焦点をあて、環太平洋地域における東アジア系ディアスポラの表現が、単なる文学的価値にとどまらず、東アジアの近代における歴史の証言にして批判的干渉であることを明らかにしようとする。

（３）理論的枠組み

こうした東アジアのディアスポラ文学を論じる際に忘れてならないことは、戦前の植民地主義が戦後の東アジア各国では人種主義の問題として現れることである。その意味で、戦前の大日本帝国の植民地主義の形態、戦後には宗主国 - 植民地問題がホスト社会 - マイノリティ問題となるプロセスの分析を行いつつ、それがどのように本研究で扱う文学作品に影響をあたえて生み出され、いかなる歴史的干渉となっているのかを解析する必要がある。そのためのフレームワークの構築のために、欧米では相当の蓄積がある植民地主義（帝国主義）研究と人種主義研究の成果を東アジア、とりわけ戦前と戦後の日本の植民地支配と帝国主義、そこから生じた人種主義体制の移行過程に適応することを試みるものである。そこにこそ焦点をあてることで、東アジアのディアスポラの表現が単なる文学的価値にとどまらず、東アジアの近代における歴史の証言にして批判的干渉であることを明らかにする。

４．研究の成果

本研究は、これまでの研究カテゴリーからすれば比較文学研究の枠に入るものと思われるが、 先述したように、従来の比較文学とは異なり、単なる同時代性、テーマの類似性、構造的な相同性といった参照点に おいて文学作品を研究するものではない。 むしろそうした国民語・ 国民文化間の比較研究的観点からは決して対象化できないディスポラの文学作品を歴史的かつ理論的に扱うことに特色がある。とりわけ日系、朝鮮系、沖縄系といった東アジアのエスニシティの文学を超域的に扱った研究はこれまでないので、この点はきわめて独創的なものと言うことができる。また、一定の時代（第二次世界大戦前後）の超地域的な（環太平洋圏）社会変動を、東アジア系ディスポラに着目し、そのコミュニティ、ホスト社会、ホームランドの諸関係の変容を表現として対象化することから生み出された文学作品を分析・考察するというアプローチをもかつ てないものであり、本研究の特色にして独創的な点であった。得られた成果としては、いわゆる学際的な取り組むによる文学研究の新しい事例を提出することはもちろん、 グローバル状況のもと、先進国社会では常態となっている多言語・多文化社会状況における文学研究の新たな地平を切り開く意義を開示しえた。また、戦前の大日本帝国から戦後のアメリカ合衆国へと覇権が移譲される東アジアの地政学的空間に、欧米の人種主義に関する議論を批判的に検証しつつ接合することで、東アジア系ディアスポラの問題を再分節できたことは、本研究のユニークな成果であったと考える。こうした研究成果を、本研究が扱ったエスニシティ別に示せば以下のようになる。

(1) 日系アメリカ人のディアスポラ文学の研究

従来、アメリカ文学の１分野としてしか扱われることのなかった日系アメリカ人文学を、あべよしおという帰米二世で強制退去と強制収容を第二次世界大戦中に米国で経験し、アジア太平洋戦争に情報局員として参戦した人物の自伝的小説『二重国籍者』（東方出版、1971 年、1972 年）を対象に、第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制退去・強制収容の経験が、米国と日本の植民地主義と人種主義との輻輳的な関係において生じたことをテクストから読み解いた。

(2) 在日朝鮮人文学の戦後史的観点からの再分節

日本語文学のマイナー文学という位置づけであった在日朝鮮人文学を第二次世界大戦後の「環太平洋」という関係史的視点から、第一世代の在日朝鮮人の作家が戦後の東西冷戦構造下の諸国民国家編成の間隙に落と

し込まれつつ、その状況を日本と米国の植民地主義を再分節することで、文学作品というより環太平洋戦後体制への歴史的介入としてあったことを明らかにした。また、戦前生まれの在日朝鮮人作家高史明史に、インタビューする機会を得て、そこから在日朝鮮人文学というジャンルが戦後日本に生まれた歴史的経緯を、高氏の自らの作品についての貴重な証言から整理することができた。

(3)沖縄文学のディアスポラ文学としての再設定化

戦後の沖縄文学が、日本帝国主義による支配から米軍占領そして本土復帰という歴史的過程のなかで生まれた状況的な表現であるだけでなく、反植民地主義的な様相を普遍的に持つことを、吉田スエ子「嘉間良心中」（1984）を対象に分析し、そこに日本とアメリカ合衆国の植民地主義によって沖縄に生み出されたジェンダー体制と沖縄内部のディアスポラの問題があることを明らかにした。

(4)日本の人種主義の分析と考察

大日本帝国がある種の人種主義国家であり、その体制が戦後にも継続していることを欧米での人種主義に接合することで敷衍した。通常ヨーロッパによる非ヨーロッパの支配という文脈で論じられる有色人に対する人種主義が一般化されていることを、戦前の日本の植民地支配を検証することで、人種主義がかならずしも既定の「人種」を前提にするものではなく、植民地なき植民地主義の産物にほかならず、環太平洋地域にける東アジア系移民たちに大きな前提となっていることを明らかにした。

５．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計３件）

① 李孝徳、あべよしお『二重国籍者』と解放のかたち―日系二世の忠誠と反逆を超えて、東京外国語大学・総合文化研究、査読なし、12 号、94-118
② 李孝徳、人種主義の歴史のなかの日本、インパクション、査読なし、174 号、44-52
③ 李孝徳、反植民地幻想―吉田スエ子「嘉間良心中」と沖縄文学、東京外国語大学論集、査読有り、第 86 号、2013、1-15

〔図書〕（計３件）

① 李孝徳、他、大月書店、いのちと責任、2012、216
② Hyoduk Lee、他、World Scientific Pub Co Inc.、The Trans-Pacific Imagination: Rethinking Boundary, Culture and Society、2012、pp.141-165
③ 李孝徳、他、以文社、レイシズム・スタディーズ序説、2012、320

６．研究組織
(1)研究代表者

李　孝徳（LEE　HYODUK）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：90292721